

氏名（本籍）	** モリ	サトル	大 森 悟（茨城県）
学位の種類			博 士 （美 術）
学位記番号			博 美 第 62 号
学位授与年月日			平成11年 3 月 25日
学位論文等題目			〈論文〉写実的身体 〈作品〉写実的身体
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教 授	（美術学部） 大 沼 映 夫
（論文第1副査）	”	”	（ ” ） 高 橋 彬
（作品第1副査）	”	”	（ ” ） 野 田 哲 也
（副査）	”	助教授	（ ” ） 坂 田 哲 也
（ ” ）	”	講 師	（ ” ） 渡 辺 好 明

（論文内容の要旨）

本論文は私の初期の作品「人」から、最新作である「外部感覚の奇妙な浸透」までの17作品を年代順に取り上げ、考察を加えたもので、いわば私の精神的芸術活動の覚書ともいえるべきものである。私は常に作品に生命感を表現することを目的に、身体知覚の性質を取り上げ、素材とこれらが作り出す様々な関係に新たな表現の可能性があると考え、この形態化を試みてきた。本論考では、これまでの実験的表現活動における個々の作品ごとの目的、方法、結果を中心に考察し、前後作品との関係性を検討して研究活動の成果を秩序立て、体系化することを目的としている。

本論文は、序章「ある行程に関するプロジェクトの周囲にあるもの」、第1章「イメージの広がり」と方向」、①次元の往来、②知覚される輪郭、第2章「経験の超越性」、①体験、②キーワード、③メカニズム、そして結語の各章から成っている。

序論では、一つの作品（プロジェクト）の成立の過程にみられる動機（主体）と制作の結果（客体）であるドローイング、エスキース、制作メモ、作品の図版等を、知覚の素朴な記録であるとの考えから、これらの資料を用いて、作家としての私の作品制作における「現象の秩序」と「イメージの流れ」を考察することを述べている。

第1章「イメージの広がり」と方向」の①「次元の往来」では、作品No.1～3（いずれも絵画作品）に描かれた線の性質について考察を行った。線は一つの「イメージの変換の導入部」であり、

多様な方向性を持った力を内在するが、知覚世界と意識世界という異なる次元を往復する過程で、実際に見える現実世界の中に入り込み、意味を成しうる分節単位で輪郭を生み出すことを明らかにした。また、表象的現われである線からイメージの世界へ通じる意味が読み取れるために、絵画的な表現が成立することを検証した。

②「知覚される輪郭」では、No.4～7を中心に、モチーフと背景の関係性を明らかにするとともに、皮膚様の薄い膜が輪郭を形成する、という新しい輪郭の概念を導き出した。私の過去の作品表現の中にはすでに、図らずもこの背景とモチーフの関係性が成立しており、過去の作品例をとってこの関係性を研究した。それにより二者の間にはどちらが主で、どちらが副であるといった明確な役割は本来存在せず、それを見るものの焦点のあて方、あてる場所、範囲によって両者の関係は如何ようにも変化しうるものであることが理解された。背景とモチーフの間に起こるずれは知覚のレベルで起こる「ずれ」であることを考慮し、これまで線として認識してきた輪郭の本質を、独自の解釈に基づいて空間作品に表現し、知覚の概念化をはかった。その結果、体験による知覚の記憶にも、(空間を分節する概念として)輪郭が存在しており、この曖昧な存在のイメージは現実の世界から記憶の世界まで包み込む、非常に薄い膜の形として認めることができた。

第2章「経験の超越性」では、輪郭の概念の探究を通して明らかになった「肌」と「ゆれ」という無意識の領域のキーワードとそのメカニズムについて考察を行った。

①「体験」では、これまで明らかにしてきた輪郭の概念を、「薄い膜状の人型」、「スライド写真」、「照明」など多義的な要素を駆使することによって体験的空間を作成し、身体知覚として問う表現を試みた。輪郭は観客の存在と無関係にあるものではなく、輪郭を見る主体、客体およびそれらを取りまく全てのものの共存関係から生まれるものであり、変動性に富む不安定な境界線上に提示されている。このような実験的作品表現により、私の「肌」における知覚作用が、イメージを形態に還元する際に強い影響を与えていることが明らかになった。輪郭という概念はきわめて漠然としたものであるが、人がどのような単位で輪郭の決定を行っているかについて検討し、また、輪郭が決定した瞬間にイメージも同時に広がり始めていることについても体験的な検証を行った。その結果、人は瞬間的に無意識的な輪郭を作る機能を持っていることが明らかになった。

②「キーワード」では、作品12～14によって現在的知覚と過去の想像知覚を体験できるように設定し、キーワードとなる「肌」が、輪郭と同様に表現の要素として作品に含まれることを明らかにした。「肌」は作家(私)の私的世界であり、無意識の領域に存在し、人を描写するときにはその輪郭を形成し、広義には現実の世界に存在するあらゆるものに伴って現われる皮膜である。「肌」は、内部にみずみずしい肉を持つものであると同時に、外界と接するときにはその最先端であり、作品の中にあっては敏感な触覚の延長であって、リアルな感覚を他者に伝え、自己にも伝えるものである。

③「メカニズム」では、すでに述べた「肌」は、いつも新たな形で見え、決して同じ現われ方をすることはなく、相対する領域に対してその間を行き来していること、また、作家と作品とのあいだにも各々のもつ「肌」が行き来しており、あたかも「ゆれ」あうような状態で混在していることを認めた。「ゆれ」の幅は重複し、次第に繋がりを持ち始め、繋がりがまた、「ゆれ」に応じて変化する。この「ゆれ」は、直線的な振幅運動だけではなく、多様な方向にその関係が広

がることから、膨縮運動を伴う動きであることが確認された。従って、私の作品はこれらの動きを内在させた立体表現となり、観客とのあいだに新たなインタラクティブな関係を生み出すことを可能としたのだという結論に達した。